

国書古典籍中の挿絵・絵本に描かれた実在キャラクター達の存在意義
—情報学から文学論へのエチュードとして—
About the significance of existences of the real existence characters
drawn in the cut-in illustration in the book Japan classic
— Etude to construct literature theory based on information science —

相田 満

AIDA, Mitsuru

国文学研究資料館, 東京都品川区豊町 1-16-10

National Institute of Japanese Literature, 1-16-10 Yutaka-cho Shinagaea-ku Toyko

日本人が好んできた人物やキャラクターは誰か。国文学研究資料館に所蔵される古典籍刊本に収められる人物の画像を集積した『歴史人物画像データベース』は、そのような素朴な疑問に導かれて始まった。

このデータベースの出現頻度上位者には、①菅原道真 ②聖徳太子 ③曾我時致などの人物達が並ぶ。現代の我々からすれば、意外に思う人物が浮かび上がっているのだが、そもそも、昔の有名人はいったい誰で、各時代や時期では、どんな人物が好まれていたかという問いに、明確に応え得る指標はこれまで皆無に等しかった。しかし、このデータベースは、そうした問いへの答えとなる可能性もはらんでいる。

What is the person or the character that the Japanese had been liked? The data base from which it is started to be led to such a simple doubt is 'Historical character's Image-database.' This data base is accumulation of the image of the person collected to the classical print books that NIJL (National Institute of Japanese Literature) owns.

The following people are listed by an appearance frequency high-ranking person of the data base. For instance, (1) SUGAWARA Michizane, (2) Prince SHOUTOKU, (3) SOGA Tokimune, and so on. We modern will often unexpectedly think of these results. To begin with, there was no standard by which who was most famous or who had been liked at ancients was shown up to now. However, there is a possibility of becoming an answer to such a question in this data base.

キーワード: 画像データベース, キャラクター, 日本古典文学, 絵本

Keywords: Image-database, Character, Japanese classics literature, Picture books

1. デジタルアーカイヴにおける「古典」

1.1. 記憶の中の文化—放送コンテンツ—

「古典」とは何か。この問いは、デジタルアーカイヴとして、後世に残し得るべきコンテンツとは何かという問題とも共通する。

たとえば、放送コンテンツを例にあげて考えてみよう。

かつてテレビ放送業界では、ビデオテープの方が貴重なため、生放送の記録が残されないのはもとより、録画番組でさえも、ほとんどが製作される端から消磁されていた。そのため、1970年代までのNHK大河ドラマや連続人形劇などの放送番組では、総集編しか保存されていなかった。稿者が幼少期に視聴したテレビ人形劇¹⁾なども、そのほとんどは記憶の中に埋没してしまっている。

しかし、現在は、発信メディアの多チャンネル化と、情報機器の性能向上によって、安価に潤沢なサイバースペースを確保することが可能となった。そのため、コンテンツをとにかく多く保有することの方が重視されるようになり、蓄積・記録する対象を選別・吟味する意識はやや希薄になりつつある。

ユーザ側でも、すでに民生機はアナログ地上放送の全チャンネルの同時録画が可能になりつつあることからわかるように、情報コンテンツは、「選別してから入力・蓄積する」という方針から、まずは「データを貯めておいてから選別する」という方向へと大きく変わりつつある。そのような状況の変化は、デジタルアーカイヴ作成対象についての価値観や選別意識、特に「古典」観というものについても、変容を生じさせつつあるようである。

1.2. 古典とは何か

近年は「評価・選別」という基準を度外視して、徹底的なデジタル化、アーカイブ化が果たされるべきだという意見が聞かれるようになった。

「可能な限り何でもかんでも保存すべき」という選別基準は、一見無定見な見識にも思われる。しかし、長い歴史の中で価値観はどのようにも推移するものである。たとえば、それまで一見無価値にも思えたものが、新たなパラダイムを獲得することによって、俄然宝石のような輝きを発し始めることは、これまでも頻発しているものである。

かつて、科学研究補助費・特定領域研究「古典学の再構築」（1999.04～2003.3）にちなんで『文学』（岩波書店,2000.7）で、「転換期の古典」というミレニアムを意識した特集が組まれたことがあった。

特集冒頭には、「古典とは何か」ということを考える、東野治之氏[歴史学(上代)]と小峯和明氏[日本文学(中世・説話文学)]の2本の論文が配されたが、論中に提示された古典観は全く対照的なものであった。

まず、東野氏は、

古典とは、その書物が単に古いというだけでなく、時代をこえて読みつがれ、生活の規範とされたものでなければならないとされたのは、吉川幸次郎氏であった。その意味で、日本の『古事記』や『日本書紀』を古典というのは当たらないとも言われたという。これはまことにもっともな定義である。『古事記』は、本居宣長が注目するまで、ほとんど忘れられた書であったし、『日本書紀』も、その神代巻のみが神道家に尊重されたものの、それ以外はやはり近世に入るまで、かえりみられることがなかった。この点、日本の伝統社会で真に古典と呼べるのは、漢籍、とりわけ経書であったといつてよからう。(東野「日本古代の『春秋』受容」,文学 1-4,pp1-10)

と述べ、対して小峯氏は、

いったい、古典はいつから古典になったのか、先験的な与えられた聖典意識がおのずといくつかの古典を特権化し、その認識にもとづいて研究も進められ、学会も組織されてきた。

(小峯,「説話の輪郭—説話学の階梯・その揺籃期をめぐる—」,文学 1-4,pp11-20)

という認識に立つ。古典とは、作り意味づけられる

ものであるという前提に立つのである。これは、日本文学自体が中国的価値観とは異なる独自性を主張する長い営みの上に成り立ったものであるという事情を汲んでの見解である。

2. 日本人の和漢

2.1. 日本人の劣等意識

1878年(明治11)、第3回パリ万国博覧会で、最も勝利をおさめたのは日本美術だったといわれている。しかし、当時の日本人は、自国の作品をくだらないと思う日本人の劣等意識は払拭できていなかったらしい。このことについて、フランスにおける第1期の大蒐集家の一人に数えられるエドモン・ド・ゴンクール(Edmond de GONCOURT)は、次のように書いた。

[日本人には、日本の芸術〈特に日本陶器〉は中国のものであったという]この真実がしみこんでいて、中国を彼らの芸術の故国、美しきものの到来する処、彼らにとってのギリシアと考えることが習慣になっている。ある日、成島〔内務官僚の成島謙吉〕に、お国の人々の間にも蒐集家はいますか、と私が尋ねると『確かに』と答えた。次いで彼は、自国の芸術にたいする翻訳できない軽蔑のニュアンスをこめて付け加えた。『でも、わが国の蒐集家たちは、中国の作品しか持っていません』と……」

(Edmond de GONCOURT, *La maison d'un artiste, Paris, 1881*²⁾)

シャン・ド・マルス会場の、各種目の展示場や各国の陳列場が立ち並ぶ中、日本館はどぎつい装飾の中国館の隣にあり、簡潔な建築はその気品を際立たせることになった。実に、日本館の成功は、中国館の隣に位置した幸運のせいだともいわれているのであった。

全体、近代以前の日本文化は「漢」の世界を至上とする価値観に覆われていたといつても過言ではない。たとえば、仮名書きの書き物に対して、奥書・序文などに「幼童」「童蒙」のためという類の表現が多用されるのは³⁾、そうした意識の現れといえよう。漢字文化の世界は、異国のものというよりも渾然一体となって根底意識に染みついてきた。そのような環境化、「和」的世界が「漢」に優越して評価されたことは、相当に画期的なことであったのである。しかし、それらが心性として「漢」的価値観と

完全に切り離された「和的」価値観の優位性を獲得するには、近代に入ってからはまだ、相当の年月を要したようである。

2.2.日本のキャラクターの定着度

日本における「和」と「漢」のありようを考える際に、もう一つ気にとめておくべき現象がある。

たとえば、諺や、故事成語・詩句に使用される表現に、日本人の名前が現れることは、日本文化に「和」的世界が定着することと、関連するといえよう。ところが、意外にも人口に膾炙する和漢の秀句が選ばれた11世紀頃成立の『和漢朗詠集』には、日本人名は登場しない。平安時代に編纂された、諺・金言集と呼ばれる類の『世俗諺文』『明文抄』『口遊』などにおいても同様である。

古典時代において、人の口を突いてでる慣用句に日本人が意識されることは、ずいぶん後代になってからと予想されるのである。その意味において、『平家物語』冒頭などは、日本人名が慣用的に定着した現象の発露としての極初期作品とも言い得よう⁴⁾。

3.日本の昔の有名人

3.1.何をどうやって調べるか

前近代日本を中心に、日本人で有名だった人には誰がいたのだろうか。そして、その結果がわかれば、現代の我々の意識とどのように異っているかということも明確になろう。そのための方法・尺度として、どのようなものが有効だろうか。

悉皆的な調査方法としては、日本人の名前が、文化的著作物の中にどれだけ出現するかというランキングをはかることがまず考えられよう。今でいえば、Yahoo[1]などの検索エンジンに出現する人名のヒットランキングを、長期的なスパンで観察するという方法である。

この方法は、網羅的であるという点で、かなりの



[1]Yahoo!カテゴリー

信頼性が期待されよう。しかし、どれだけのサンプルあれば有効であるかが予想しづらい。

後者の場合は、過去に遡っての調査ができないという欠点がある。しかし、将来的には文化動向の定点観測を継続的に行うことによって、最も有効なツールとなり得るだろう。(ただし、その実現のためには、まず事前に、どのような人名がリストアップ可能かという事前のデータを整えておく必要がある。)

このように、尺度となり得るものには、いろいろなものが考えられよう。たとえば、ほかにも人形や、彫刻、絵画など、文字に現れたものだけに限らない、さまざまなジャンルのメディアにおいて、どのような現れ方をするかなど、さまざまなアプローチが可能である。

およそ、文化動向の定点観測を行うにふさわしい対象の特徴としては、

- ①多数の中から精選された結果が集約されたもの
 - ②その時々で、人口に膾炙していることがはっきりしていること
- などがあげられよう。これらの条件が満たされれば、有効性が保証されるであろう。

3.2.叢伝

和漢古典籍には、その人物の生き様や特徴の観点から類似する人物を集めた列伝を1タイトルの書物にまとめた作品が少なくない。「(人物)叢伝」と呼ばれるジャンルに分類される。

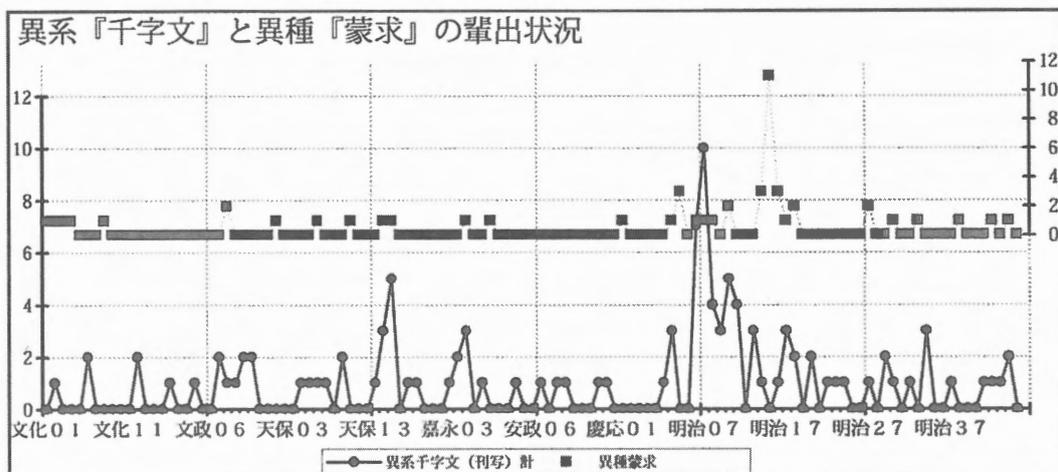
叢伝は、基本的に多くの書物から取材された人物の伝記、奇事、逸事をなどをさらに選別・抽出した形で作られる。その意味で、その編纂意識には、その編纂当時において、「この人物だけは記録したい」といった類の意識が働いていたと思われる。その意味において、有名人という観点での取材源として最適な特徴を持つが、しかし、その総体は必ずしも判然としてはいない。『国書総目録 補訂版』や『古典籍総合目録』にもとづくそれぞれのデータベース化においても、書籍の主題分類は未整備の状態にある⁵⁾。

この類の書物は、中世以前のもは多くない。たとえば試みに、『本朝書籍目録』(編者未詳・鎌倉末期成立)中から叢伝に含め得る典籍を抽出してみても、そのタイトルは決して多くないことが確認される[2]。しかも、佚書となったものも少なくない。

[2]本朝書籍目録中に見える「叢伝」的典籍(和田英松『本朝書籍目録考證』より)			
1.神事	神別記	10卷	佚書。新井白石『神書』に「神別記に、功德ありし人々をまつりし事をするせしなり、今は此書なきなり、」
	和漢春秋	不明	大外記師弘撰。佚書。
16.人々伝 (人之伝[刊本]・人伝[神宮文庫本])	儒伝	3卷	佚書。
	撰関大臣	2卷	忠仁公[良房]~安祥院[吉忠](天正九上巻奥書)
		1卷	佚書。
	大将	1卷	佚書。
	本朝神仙伝	1卷	大江匡房撰。現存。
	菅家	1卷	群書類従本系現存。
	日本儒林	1卷	菅原大江二家、その他の伝。佚書。
18.雑々	故賢	1卷	佚書。
	高名録	1卷	江帥抄。『河海抄』などに引用あり。佚書。
	名所抄	1卷	佚書。地名・居所に関するものだが、中国の『皇覽』の例もあるように、その地に関する人物に関する記述もあった可能性も高い。
	居室抄	1卷	
19.雑抄	『打聞』『古事談』『続古事談』など		

ほかに、『〇〇蒙求』のような唐の李瀚撰『蒙求』の体裁に倣った続撰本(国書で約70種存在『〇〇蒙求』の書名が多く約500名を掲載)や、『〇〇二十四孝』など、幼学書の伝統を引き継いで、その編纂主旨を書名に反映させた漢文で書かれた叢伝類もある。[3]に幕末以前に輩出された、日本人をして作られたものが多い。そのため、たとえば「百掲う『蒙求』型人物叢伝の一覧を示したが、この類の書については、ほぼその総量が判明しており、その数は決して多くはないが、幕末から急増する輩出状況を見せている[4]。

3.3.絵と人物伝がセットになったもの



[4]唐の李瀚撰『蒙求』の体裁に倣った続撰本の幕末期の輩出状況 [転載元：幕末・明治期の「蒙求」,相田満,国際日本文学研究会会議録第18回(1994),国文学研究資料館,pp109-133(25)]

[3]日本人を扱う『蒙求』型人物叢伝の輩出状況(幕末以前)

参考：相田、『蒙求』型類書の世界、相田 満/和漢比較文学学会編『和漢比較文学の諸問題』8/和漢比較文学叢書/(汲古書院)/pp109-128(20) 参考：相田、長崎浩斎(健)・東条琴台(耕)の『千字文』『蒙求』目録一付・日比谷加賀文庫蔵『補訂浩斎所蔵千字文蒙求二種書目』翻刻一、相田 満/中野猛：編『説話と伝承と略縁起』94/新典社研究叢書/(新典社)/pp222-244(23) 参考：相田、幕末・明治期の「蒙求」、相田 満/国際日本文学研究会集會會議録第18回(1994)/《国文学研究資料館》/pp109-133(25) ※日本人を扱わないため、除外したものもある。たとえば、『蒙求続貂』(恩田仲任)・『医林蒙求』(樋口好古)など。 ※人物を扱わない、入門・初学書としての『蒙求』は除外した。たとえば、『俳諧蒙求』(堀麦水)・『吹寄蒙求』(銅脈先生・偏屈道人)・『国字蒙求』(伊藤有隣[全節])						
扶桑蒙求	不明	永濟	1239	曆仁2	著者存命	尊經閣文庫蔵『書札類稿』所収の元禄13年(1700)の加賀宰相(綱紀)より水戸の増田寿得にあてた書状中に、この書名がある。『聖徳太子玉林抄』巻1、巻1、『上宮太子拾遺記』第7などに逸文があり、『玉林抄』巻19の逸文は「大津初詩 素盞創歌」との対標題が記される。彰考館蔵に『扶桑蒙求私註』があるが、これは巻六のみの零本で、しかも見出しが四字句標題を採らず、釈氏のみを扱う。その意味で、『扶桑蒙求』と「私註」との関連にはやや微妙なものがあるが、無関係とも言い切れない。『和談抄』と合冊で、彰考館蔵。
伝法蒙求	3巻2冊		1642	寛永19	刊	駒沢大蔵。
釈書蒙求		祖寛	1673	延宝元	序	『元亨釈書』より取材。国会図書館に祖本の1冊本があるほか、延宝4年版1冊本が高野山大・東大・東北大などに、元禄10年(1697)版の5巻4冊本が大谷大・大正大・龍谷大などに蔵せられる。
本朝蒙求	3巻3冊	菅亨(中徹)	1679	延宝7	序	貞享3年(1686)刊。文庫などに蔵せられる。蔵谷小波編『大語園』の取材資料にもなる。明治10年(1877)の刊本もあるように、息長く享受された。
桑華蒙求	3巻3冊	木下公定(葵峯)	1710	宝永7	序	外題「新撰自註桑華蒙求」。日本と中国の故事を対にする。無刊記本のほか、天保15年(1839)木活字本、福田宇中箋注の明治15年(1882)刊本などがある。引用書目録を付すものもあるが、これは後人の附会。岸鳳質『扶桑蒙求』は、この書の日本の故事の部分から多く採る。
医学蒙求	3巻3冊	伊東見龍	1742	寛保2	序	寛保3年刊(1743)。首巻は標題を陰刻して独立させる。歴代の医人列伝。
蒙求拾遺	3巻3冊	大江(桂)広保	1749	寛延2	序	宝暦2年(1752)刊。
医家蒙求	不明		1754	宝暦4	輩出	『江戸時代書林出版書籍目録集成』収載の『宝暦四年書籍目録』記載。
平安蒙求	不明		1772	明和9	輩出	『江戸時代書林出版書籍目録集成』収載の『明和九年刊書籍目録』記載。
俳諧和漢蒙求	1巻1冊	千秋館大虎	1780	安永9	序	人物名二字を対比しているが、四字標題ではない。東京国立博物館、香川大蔵。
日本蒙求	3巻	恩田仲任	1780	安永9	前後	巻頭「隸事」、外題「日本蒙求」。日本の故事より取材する。内閣文庫に自筆本を蔵するほか、無窮会図書館織田文庫などに蔵せられる。
扶桑蒙求	3巻	岸鳳質(根岸嶮谷)	1818	文政元	序	天保14年(1843)刊。明治4年(1871)の後刷もある。日本の故事から取材するが、木下葵峯『桑華蒙求』から日本に関連する故事を節略したものが目立つ。
大東蒙求	1巻	岸鳳質(根岸嶮谷)	1818			山岸徳平論文による。写本。未見。
扶桑禅蒙求	3巻	岸鳳質(根岸嶮谷)	1818			『補訂浩斎所蔵千字文蒙求二種書目』記載。
扶桑釈氏蒙求	3巻	岸鳳質(根岸嶮谷)	1818			『補訂浩斎所蔵千字文蒙求二種書目』記載。
国史蒙求標題	3巻4冊	衣笠孝郷	1825	文政8	序	京都大学蔵。



[5]Web公開版「歴史人物画像データベース」

そこで、こうした特質に着目して、古今の人物群から取材された典籍で、絵入りのものを対象として、集中的なさらに調査を行うならば、「日本人が知っていた本当に有名な人物は誰か」ということを証するための有効な指標が求められるという道筋は成り立ちそうである。

「歴史人物画像データベース」は、こうして構想されたものであった。

4.歴史人物画像データベース

4.1.概要

「歴史人物画像データベース」は、古典籍に描かれた挿絵の人物画像（主に日本人）を集積したものである。取材源は国文学研究資料館所蔵本にかかり、明治以前の国書古典籍刊本に収められた人物画像を切り集め、それぞれの人物が各典籍でどのように描かれてきたかを比較対照できるように配慮している。

2005年度中公開を進めているものとして、

①高精細画像による Web 公開版[5] (648 名 898 画像収録[9 作品より取材])

<http://base1.nijl.ac.jp/~rekijin/syouzou.html>

②検索システム付 DVD 版[6] (3,168 名分 4,740 画像収録[59 作品より取材])

の 2 種類を予定している。①の高精細画像版は、TIFF 形式の画像を ZOOMA 形式フォーマット（ドリームテクノロジー社）に変換することにより、画像の高速表示を実現し、画像の無断引用・無断転載を防ぐためのプロテクトをかけたものである。

②のデータベースは DVD-ROM に格納されたスタンドアロン環境で動作するが、異体字、異称、暦

日検索など、高次の検索を可能としたシステムが同梱するほか、人物に関する詳細情報として、『芳賀人名辞典』『地下家伝』をデータベース化したデータを搭載する。また、表示に使用される画像は Jpeg 劣化画像を使用する。

4.2.取材典拠作品の特徴

検索システム付 DVD 版に使用した 59 作品の内訳は次にあげるとおり。

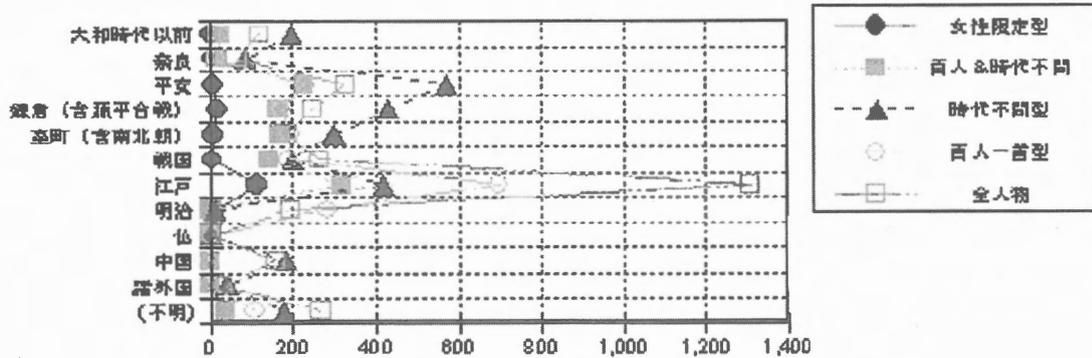
英雄百人一首・百人一首図絵・若鶴百人一首・武家百人一首・役者三十六家選・粹興奇人伝・続英雄百人一首・近世名婦百人撰・列女百人一首・本朝孝子伝・秀雅百人一首・万家人名録・崎人百人一首・義烈百人一首・絵入赤穂四十七士詩伝・徳川十五代記・武勇魁図会・本朝百将伝・狂歌百人一首・新編歌俳百人撰・大日本国開闢由来記・本朝列仙伝・前賢故実・先賢遺芳・先哲像伝初輯・八幡太郎一代記・利運談・宮本武勇伝・岩倉具視公之実伝・明治英銘百詠撰・現今英名百首・絵本威武貴山・絵本武者備考・明治中興雲台図録・明治中興凌煙図録・源義経一代記・絵本武蔵鑑・和洋奇人伝・今人名誉百首・徳川東国武勇伝・神君長篠大合戦・玉石雑誌・絵本武勇伝・豊臣昇雲録・好古事彙・源平盛衰記図会・絵本故事談・絵本忠経・絵本徒然草・絵本堪忍記・円光大師御一代記・（弘法大師行状記）・武稽百人一首・俳人百家撰・近世報国百人一首・訓蒙皇国史略・（集古十種）・都絵馬鑑・絵本倭比事・三国七高僧伝図会・神風遺談〔計 59 作品〕



[6]検索システム付DVD版

[7] DVD版59作品の典籍の特質

種別	時代不問型	時代限定型	百人一首型	女性限定型
書名例	英雄百人一首 百人一首図絵 若鶴百人一首 武家百人一首：他	近世名婦百人撰 万家人名録 絵入赤穂四十七士詩伝 徳川十五代記：他	英雄百人一首 百人一首図絵 若鶴百人一首 武家百人一首：他	近世名婦百人撰 列女百人一首
件数	32/59	25/59	19/59	2/59
比率	52.5 %	41.8 %	31.1 %	3.3 %



[8] 時代別・典籍の特徴別の出現数比較

これらの典籍の成立年は、刊年の判明するものだけに限れば 1686 年(貞享 3)～ 1893 年(明治 23)成立のものが占められ、不明のものもすべて江戸時代以降にかかる。

これら 59 作品を、それぞれ収録される人物の集まり方から 4 つのタイプに分けて分類したものが [7] で、さらにそこから、登場人物の時代別に分類し分析したものが [8] で、いずれも、扱われる人物の時代は、江戸期・平安・鎌倉・室町の順に多いということがわかる。

また、さまざまな時代から取材された人物で構成された典籍(時代不問型：▲印)には、平安・鎌倉の人物が繰り返し現れることが多く、結果的には、そうした人物が「古典的な有名人」として、人々の記憶に残されていくことがわかるのである。

調査を進めるに際して、まず DVD 版を作成する際に使用した 59 作品の中から、分析対象とするにふさわしい性格を持つ典籍を抽出した。

具体的には、女性だけを集めたものとか、百人一首型や収録人物の時代が限定されている作品などは、収載傾向に偏りがあるため、分析の対象外とすることとした。その結果、さまざまな時代から集められた人物が集約された「時代不問型」の絵入叢伝が分析対象となり、31 作品、延べ 1,748 名が、分析作業の対象となった。

そして、その結果、出現頻度上位 29 位以内に入った人物と、調査対象作品の内訳は、[9] で示すとおりとなった。

5.日本の昔の有名人は誰か

[9]時代不問型典籍中に現れる人物群

- | | | | |
|------------|--------------|------------|------------------|
| 1/菅原道真(17) | 9/熊谷直実(11) | 17/日本武尊(8) | 25/在原業平(7) |
| 2/聖徳太子(15) | 10/源義経(11) | 18/藤原鎌足(8) | 26/足利義満(7) |
| 3/曾我時致(14) | 11/柿本人麻呂(11) | 19/源満仲(7) | 27/武蔵坊弁慶(7) |
| 4/源義家(13) | 12/法然(11) | 20/源頼政(7) | 28/坂上田村麻呂(7) |
| 5/楠木正成(13) | 13/源頼朝(9) | 21/梶原景季(7) | 29/源信(7) |
| 6/足利尊氏(13) | 14/豊臣秀吉(9) | 22/曾我祐成(7) | ※〔 〕内は出現頻度を示す件数] |
| 7/西行(12) | 15/平清盛(8) | 23/新田義貞(7) | |
| 8/武内宿祢(11) | 16/楠木正行(8) | 24/小野篁(7) | |

【調査対象とした作品】

英雄百人一首,百人一首図絵,武家百人一首,粹興奇人伝,続英雄百人一首,列女百人一首,本朝孝子伝,騎人百人一首,義烈百人一首,武勇魁図会,本朝百将伝,狂歌百人一首,新編歌俳百人撰,本朝列仙伝,前賢故実,先賢遺芳,先哲像伝初輯,絵本威武貴山,絵本武者備考,利運談,絵本武蔵鏡,絵本堪忍記,絵本忠経,絵本俊比事,訓蒙皇国史略,三国七高僧伝図会,集古十種,玉石雑誌,都絵馬鑑,和洋奇人伝,絵本故事 (計 31 作品)

[10]Web公開版のGoogle人気ランキング

1/織田信長 [245000]	9/伊達政宗 [73000]	17/三遊亭円朝 [31300]	24/大伴家持 [23200]
2/豊臣秀吉 [217000]	10/日本武尊 [62800]	18/平将門 [31000]	25/藤原定家 [20800]
3/聖徳太子 [182000]	11/平清盛 [52200]	19/持統天皇 [28500]	26/武蔵坊弁慶 [22700]*
4/源頼朝 [106000]	12/道因法師 [51300]	20/和泉式部 [27200]	27/在原業平 [21400]
5/源義経 [105000]	13/足利尊氏 [42000]	21/松本幸四郎 [27000]	28/柿本人麻呂 [21300]
6/紫式部 [104000]	14/清少納言 [39000]	(※含現代人)	29/足利義満 [20900]
7/法然 [83700]	15/小野小町 [37700]	22/紀貫之 [24200]	30/柴田勝家 [19300]
8/菅原道真 [76800]	16/天智天皇 [37600]	23/西行法師 [23400]	

上位にあがった人物の内訳を見ると、中世以来盛んに行われるようになった信仰の対象と深い関わりがあるものが目立つ。

こうした評価法によって浮かび上がる人物群に共通することは、さまざまな物語伝承を包含するだけでなく、中には信仰の対象となるに至るほどに強烈な個性を持っていることである。

まず、1位の菅原道真は天神信仰、2位の聖徳太子は太子信仰、4位の源義家は八幡信仰という具合にである。また、3位の曾我時致は曾我兄弟の兄五郎の方で、曾我兄弟の話は、若くして非業の死を遂げた曾我兄弟への同情が、やがて鎮魂から信仰に変わり、伝説化するとともに、説経の題材として室町期以降、正月に決まって扱われるのみならず、歌舞伎においても、いつしか「吉例」として「曾我物」が正月公演の祝儀物として定番化するに至っている。

そして、そうした個性が魅力となり、その時々の人々の好尚にかなうように、再解釈が繰り返されてきたということであろう。

一方、日本の紙幣の絵柄に使われた人物のランキングでは、1位に聖徳太子[7回]、2位に菅原道真と和氣清麻呂が並び[6回]、4位・武内宿禰[5回]、5位・藤原鎌足[4回]、6位・神功皇后[3回]などと続き、菅原道真や聖徳太子が上位者に並ぶ点で共通する。

このようなことを考えあわせると、この一覧が日本人の心性に深く根ざしたものであることが首肯されてくるのである。

6.現代人との意識差

これらの人物群が、現代人の感覚とどのように異

なるのだろうか。そのことを明らかにするためには、これまで、アンケートを主とした社会調査・教育調査が必要であった。しかし、近年では Web 検索エンジンのヒット件数を利用した調査でも効力を発揮するだろう。

参考までに、高精細画像による Web 公開版[5] (648名 898画像収録[9作品より取材])を使用して Google 検索にて件数を求め、その件数順に再配列したものが[10]の一覧である。

ここで、留意しておかねばならないのは、時代不問型の総集では、同時代の人物はどうしても上りづらくなるという傾向があるということである。

加えて江戸時代には、時の為政者を直接に描いたりすることが憚られたため、上記調査には上りづらいこともある。たとえば、東照権現に祀られた徳川家康は 261,000 件にも上るが、それがデータベースに上がらないのは、近世期の刊行物において図像化が憚られた事情による。こうした人物画像が多数上りようになったのは、明治期以後の刊行物にかかることである。

7.情報ナビゲーションの必要性

昔の有名人はいったい誰で、各時代や時期では、どんな人物が好まれていたかという問いに、明確に応え得る指標はこれまで皆無に等しかった。現代ならば、アンケートなどを通しての標本調査なども考えられようが、そのためにかかる手間も費用も莫大なものとなる。ところが、最近ではこのように Web 検索エンジンのヒット数という、新たなツールを手に入れることができ、これまで不可能だったことが、発想次第で興味深いデータを入手することができるようになってきているのである。しかし、それとても過

去に遡っての調査は不可能である。

このような指標は、学術面においては、その当時に通底する哲学・イデオロギーを把握するという、文学・歴史・民俗・教育学などの分野で意義ある情報となるだろう。また、「古典的有名人」の人気とその言説とは相関関係があるところから、文学的研究の指針としても有効で、さらにはエンターテインメント産業におけるコンテンツの掘り起こしや、地域振興の新たな素材ともなり得るものといえる。

デジタルアーカイブスが陸続と発信される現在、その情報は激増の一途をたどっているが、その現状は、ただ紙から電子データへと媒体の形態を変えただけのものにとどまったにすぎず、ユーザ側はかえって膨大な情報の選択肢に押しつぶされかねない状況にある。

潤沢なデジタル資源から、いかに情報を読み解き、説明するかという、データマイニングをサポートするための枠組みは、ユーザからの発案を待つよりも、発信者側のコンセプトに依存する。特に初等・中等教育においては古典学に関わる素養の減衰が、ますます顕著となってきている現在、想定されるべきユーザ像自体が見直されるべき時にさしかかっていることが痛感されてならないのである。

8.おわりに—“人物”から“キャラクター”へ—

最後に、本論において、標題に「キャラクター」をあげながら、本文中のほとんどでは「人物」という用語を使用してきたことに関して述べておこう。

印刻を意味するギリシア語に由来するキャラクター(character)は、一般的に性格・性質という意味を持つが、そこから派生して、今では狭義の演劇・小説・漫画・アニメなどの登場人物(の役柄)を指す概念が一般的になっている。そして、今やその言葉は、あらゆる創作活動の原点と認識され、現代のクリエイター達にとって作品の出来を左右するものは、キャラクターの成否如何にかかるといふ発想も常識と化し、キャラクター商品を始め、作品世界を飛び越えた愛好者と、巨大な経済的価値を生み出すものへと変貌し、日本から世界に発信される主要な文化コンテンツともなっている。

キャラクターの重要性を打ち出したものに、小池一夫氏の主導になるキャラクター造形学科(大阪芸術大学)の試みがあるが、文学、とりわけ日本古典文学の世界においても、享受の実態に則してみれば、

さまざまな作品はキャラクターに従属するといっても過言ではない。ところが、不思議なことに、これまでの日本の文学研究、とりわけ古典分野の研究においては、こうした現象を受け止める素地、すなわちキャラクターを主体とし、積極的に評価する研究体系が構築されることはなかった。また、研究論文も皆無に近い状態にある。

その最大の理由としては、文学以外のメディアに現れるキャラクターの評価軸・分析のための観点が定まっていなかったことがあげられよう。絵画・演劇・伝承・信仰など、さまざまな場で共有・変容して現れても、それまで時代・媒体(メディア)などに立脚して思考されることの多かった研究の場では、対応しきれなかったためである。

ある典籍が、内容とは別次元で、尊崇され、特別な扱いを受けるに至る現象を聖典(カノン)化と呼ぶが、人物造形の生成と享受の様相は、まさに現代的な意味におけるキャラクターに異ならず、それを扱う研究主題は、ある意味で、聖典の対極に位置するものかもしれない。文学史に対するキャラクター史というものも、本来ならとうに構想されるべきであつたらう。

今や日本人の生活は、ずいぶんと古典や伝統と縁遠いものになっている。しかし、それに対して中国・台湾などでは、伝統的キャラクターと新渡の日本発のサブカルチャーに由来するキャラクターとが混在して享受される風景が、あちこちで見られる。キャラクターを共有するということが、世代や地域をつなぐことのできる共通の話題や教養を共有することであるといっても過言ではない。

そのような状況下、本稿で述べたようなデータベースの試行版が、「人物 画像」の掛け合わせによる Google 検索で 2 位を、「人物 画像 データベース」の掛け合わせ検索では 1 位にランクされている^{*)}。そうした実績を勘案するにつけ、今後このデータベースが果たす役割は、ますます重みを増していくことだろう。

9.補記

本論は国文学研究資料館文学形成系における研究プロジェクト「古典形成の基盤としての中世資料の研究」による研究成果の一部である。記して謝意を伝えたい。

*1 そうした中、海外吹き替え版が発見されたり、『ひょっこりひょうたん島』のように、当時小学生だった伊藤悟氏が5年間の放送すべてをノートに詳細に記録、残してあったテープと照らし合わせてリバイバル作品が復活したという、きわめて希有かつドラマチックな例もある。「伊藤悟のひょっこりひょうたん島漂流」(<http://www009.upp.so-net.ne.jp/hyoutanjima/index.html>)

*2 木々康子,林忠正とその時代—世紀末のパリと日本美術—,第二章 万国博覧会と日本美術,一八七八年パリ万国博覧会,pp29-37,筑摩書房,1987

*3 たとえば、名所図会のはしりである『都名所図会』凡例など。

*4 『平家物語』冒頭部分は以下のとおり。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を彰す。奢れる人も久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き者も終には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

遠く異朝を訪らへば、秦の趙高、漢の王まう、梁のしゅうい、唐の禄山、これらは皆旧主先皇の政にも従わず、楽しみを究め、諫めをも思い入れず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざっしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。

近く本朝を伺ふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、近く本朝を窺ふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、此等はおごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まちかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝い承るこそ心も詞も及ばれぬ。』

*5 相田満,和漢古典学のオントロジの資源化のために—『国書総目録』の分類について—,ナオ・デ・ラ・チーナ(東アジアの出版文化ニューズレター) 8,(文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの出版文化」(東北大学東北アジア研究センター内)),pp105-112(8),2004

*6 「弁慶」のみの場合は、214000 を数えたが、店舗名・商品名等が多く混じったため、数字としては採りあげなかった。

*7 <http://www.77bank.co.jp/museum/okane/02.htm>

*8 相田満,「歴史人物画像データベース」構築奮闘記,情報知学会誌 15-2(May 2005),pp7-14(8),2005